

令和7年度 学校評価「子どもが育つ学校～ころ・からだ・きずな～」

資料1

学校教育目標:児童生徒一人一人の可能性を可能な限り伸ばし、社会の一員として自立し自己実現と共生に向けて主体的な取組を行える児童生徒の育成を目指す

令和7年度 重点目標

- (1) 「なぜ」に基づく対話を通した安全・安心な学校づくり
- (2) いのちと人権を大切に信頼される学校づくり
- (3) 情報発信・情報共有による開かれた学校づくり
- (4) 個々のニーズに応じた教育及び社会的自立に向けたキャリア教育の充実
- (5) 校務や教育におけるICT機器の活用
- (6) 同僚性の醸成及びチームの連携体制の構築

【評価】(教員・保護者共通)
A: 3.2以上
B: 2.8以上3.2未満
C: 2.4以上2.8未満

【教員評価基準】
(4):よくできた
(3):できた
(2):あまりできなかった

【保護者評価基準】
(4):そう思う
(3):どちらかといえばそう思う
(2):どちらかといえばそう思わない
(1):思わない

【保護者アンケート回答数】
・小学部:112名
・中学部:70名
・高等部・訪問教育:81名
・分教室:3名
合計263名

	教 員				保 護 者				
	学部・分室目標	具体的な取り組み	達成状況	評点	評価	保護者アンケート	評点	評価	成果と今後の課題
小学部 重点目標 (1)(2)(4)	①キャリア教育における挨拶や人との関わりを重視し、友達や教師に対する、実態に合った挨拶や返事、誇い方や要求の方法を身に付けられるよう指導に取り組む。	①挨拶は朝・終わりの会で挨拶や呼名に対し返事をする場面を設定し、継続的に取り組む。挨拶や返事、声のかけ方や肩を叩くなど、児童の実態に応じた方法を提示するために教師間や児童と相談しながら指導支援する。	①教師が実態に応じて促しや支援を行ったことにより、言葉や身振りをを用いて自分に合った方法で挨拶できる児童が増えた。また、繰り返し手本を提示することで、言葉やジェスチャーなど、各児童に合った方法で相手を誘ったり要求したりすることができる児童が増え、児童同士の関わりが一層広がった。	3.64	A	在籍学部は、学部目標を達成するために、具体的な手立てを講じて取り組んでいる。	3.85	A	①個々の実態に応じた支援や指導をすることで、挨拶や要求の方法を身に付けることができた児童が増えた。今後も継続して取り組むとともに、より一層の定着と様々な要求方法を身に付けられるよう、指導・支援をすることが必要である。
	②キャリア教育における役割の理解と分担を重視し、決められた仕事(役割活動)を最後までやり切ったり、自ら分かって取り組んだりできるように家庭と連携をしながら指導支援をする。	②児童の実態に応じた司会や当番、係活動などの役割活動を、教師間や本人、家庭と相談して設定し、教師と一緒にしたり、繰り返し取り組んだりして活動の理解と定着ができるよう指導支援をする。	②児童の実態や課題をもとに、懇談や日々の連絡の中で保護者から聞いたお手伝いなどの家庭の様子も参考に、担任間で話し合い、児童に応じた役割活動を設定して取り組むことができた。役割理解のために、文字やイラストで示した分担表を作成したり、活動中の様子を動画撮影して振り返ったりするなど、各クラスの実態に応じたツールや教材を準備・活用することができた。毎日継続することで定着し、自ら役割活動に取り組む児童が増えた。また、学期ごとや前後期で役割を変えることで、様々な仕事に取り組むことができた。	3.57	A	在籍学部の取組を通じ、子どもの成長を感じる。	3.82	A	②児童の実態や課題をもとに、役割活動を設定し支援や指導をすることで、継続して仕事に取り組むことができた。今後は自分の役割を理解し、より主体的に取り組むことができるよう継続して指導・支援をする必要がある。
中学部 重点目標 (1)(2)(4)	①キャリア発達における挨拶や他者との関係づくりを重視し、状況に応じた挨拶や適切な言葉遣いを身に付け、他者と円滑な関係を築けるよう指導支援をする。	①朝・終わりの会や各授業等で適切な挨拶をする場面を設定し繰り返し取り組む。「ありがとう」「手伝ってください」などと言葉、身振り、カード等個に応じた表現方法を工夫し、学校生活の様々な場面で伝えられるよう指導支援していく。	①学部目標に基づき、3学年共通した授業を行い、挨拶や他者との関わり方、気持ちの伝え方などについて考える機会を設けた。「今年頑張ること」や「格好いい中学生像」について発表することができた。登下校時には自ら進んで挨拶をする姿や実態に応じた表現方法で他者との関係を深める姿が多く見られた。各クラスにおいては、朝・終わりの会や授業、教室の出入り時の場面で適切な表現を学ぶために実態に応じた支援や工夫を行い、支援グッズの活用についても検討することができた。	3.29	A	在籍学部は、学部目標を達成するために、具体的な手立てを講じて取り組んでいる。	3.71	A	①学部間で一貫したテーマで指導が行えたことで、登下校時等に自発的な挨拶が増え、個々の実態に応じた表現方法でコミュニケーションを図ろうとする姿が多数見られた。今後は個々の力に応じた場面設定や支援の工夫を行い、より一層、自発的な定着を図れるよう、指導・支援する必要がある。
	②キャリア発達における役割の理解と分担を重視し、学校生活の中で自分の役割を果たそうとする意欲や習慣を身に付けるよう指導支援をする。	②学校生活において、個の実態に応じた係活動や仕事を設定し、取組みやすいように支援方法を工夫するなどして、経験を積み重ねる機会を設ける。自己肯定感を高められるように、日々取組みを評価し認めていく。	②日常生活において繰り返し取り組む係活動では、予定表や係表に顔写真を貼り、自分の役割について見直しを持って行動でき、習慣化につなげることができた。各係の仕事内容については生徒の実態や課題に合わせた方法で具体的に説明し、やる気を持って臨めるよう立候補制にするなど担任間で工夫することができた。学年によっては道徳の授業で「自分の役割に」について取り上げ、係活動の様子を動画で撮影し、お互いの頑張っている姿を確認・振り返り・評価する機会を設けることができた。	3.30	A	在籍学部の取組を通じ、子どもの成長を感じる。	3.71	A	②生徒の実態に応じた係内容の提示や仕組み作りにより、見直しを持って行動できるようになり、係活動が習慣化する生徒が多く見られた。今後は、生徒の主体的な係活動が継続できるよう、担任間の共通理解、話し合いを深める必要がある。
高等部 重点目標 (1)(2)(4)	①人とのコミュニケーションを大切に、場に応じた挨拶、返事、マナーなどを含めた人との接し方を身に付けられるよう指導支援を行う。	①課題学習、SST、HRなどの時間を利用して、場に応じた挨拶や返事の仕方などを繰り返し伝え、練習する。語先後礼の挨拶、適切な声の大きさでの返事、身振りで応答、他人との距離感、マナーなど、個々の課題に応じた目標を設定し、習慣化するよう、教師間で協同して指導支援を行う。	①登下校や始業・終業時、SSTや道徳の時間、現場実習など、様々な場面で場に応じた挨拶や返事などを継続して指導した結果、相手に合わせた言葉遣いができるようになったり、返事も「うん」から「はい」へと改善されたりするなど、人との接し方に一定の成果が見られた。また、身振りによる応答やイラストカードの活用など、個に合わせた取組を教師間で共有しながら進めることができた。	3.53	A	在籍学部は、学部目標を達成するために、具体的な手立てを講じて取り組んでいる。	3.69	A	①挨拶や返事、マナーの指導を継続したことで、適切な言葉遣いや返事が見られるようになり、個々に合ったコミュニケーション手段も定着してきた。今後は、より自発的に取り組めるよう指導・支援を行い、場に応じた挨拶やマナーを安定して行えるよう、引き続き丁寧に関わっていくことが大切である。
	②社会的自立を目指し、責任をもって、主体的に自分の役割を果たせるよう指導支援を行う。	②朝の会、終わりの会、係活動、委員会活動などにおいて、個別の役割を設定する。自身の役割を理解して自ら取り組めるよう、個に応じた支援方法を工夫する。特別活動や行事などの役割において、学校やクラスの代表として主体的に取り組めるよう、生徒との対話を大切に、生徒達が意見を出し合い、進めていく場を設定する。	②教科係や委員会活動などの個別の役割を設定することで、見直しを持って活動することができた。仕事内容については生徒の実態に応じて調整し、やりがいを持って取り組めるように工夫することができた。生徒会活動や行事・交流会などの役割においては、生徒同士が意見を話し合う場を設定することができた。意見を集約する際には教師のアドバイスを要する場面もあるが、経験を積み重ねることで友達と主体的に取り組む姿が見られた。	3.44	A	在籍学部の取組を通じ、子どもの成長を感じる。	3.65	A	②各学年とも工夫を重ね、どの生徒にも個に応じた役割設定や支援が行われ、責任をもって取り組む姿や意見を出す姿が多く見られた。一方で、自分で状況を見て動いたり、相手の意見を聞きながら話し合いを進めたりする力は、経験を通してゆっくり育つ力であるため、今後も経験を積みながら、個に応じた支援を継続していくことが必要である。
分教室 重点目標 (2)(3)(4)	①生き生きとしたよりよい社会参加を行うために、生徒の可能性を引き出すような、様々な実践を実施する。	①交流及び共同学習、自立活動、各教科などの日常の学びをより効果的なものにするために、生徒にとって新しいことにチャレンジする機会を確保するとともに、家庭との連携を密にする。	①県立猪名川高等学校との交流及び共同学習では、福祉交流員との活動、生徒会とのあいさつ運動、交流体育祭におけるブロック演技練習から本番までの活動、交流文化祭におけるステージでの舞踏や器楽演奏・展示や販売活動、交流アート作品の共同制作、家庭科による調理実習(分教室で収穫したサツマイモを使用)、総合的な探究の時間でのリース作りなどを行った。自立活動では、学年を隔てず課題に焦点を当てて集団で取り組んだ活動により、先輩後輩間で互いを意識する場となり、学習意欲を向上させることができた。各教科では、特に職業において外部の専門家等を招き、新しい知識と経験を元に職業生活における力を養う実践ができた。各活動においては、家庭と情報共有を密に行い、事前の配慮事項から学習成果まで情報共有を行った。	3.65	A	在籍学部は、学部目標を達成するために、具体的な手立てを講じて取り組んでいる。	3.00	B	①昨年度にはなかった新たな学習機会を設けたことや、昨年度からの取組を継続して実践したことで、様々な学習の機会を確保するとともに、生徒の成長を実感することができた。特に外部専門家を招いての実践では、専門的な清掃機器の使用に関する知識技能や、技術向上への指導助言を得て、生徒達が大きな成長を遂げたことと実感している。今後は分教室として在籍生徒が、より自分らしい生き方を探求・実現できるよう、卒業後の職業生活に向けてさらに効果的な実践を行ってきたい。
	②分教室で行われている交流及び共同学習をはじめとする様々な教育活動について発信し、分教室の教育内容・実績について周知する。	②学校ウェブサイトでの発信、外部向け学校説明会の充実、校外で行われる説明会への参加など、情報発信に努める。	②学校Webサイトを通しての発信は、ブログにおいて4月から10月までの発信が30件となり、昨年度の発信回数から43%上回っている。県立川西カリヨンの丘本校の施設を利用したカフェ運営に関しては、毎月カフェカレンダーを発信して、地域の皆様に学校の様子を見ていただく機会をお知らせしている。外部向けの説明会では、学校見学や概要説明だけでなく、実際に来校生徒が職業の授業を体験する活動を取り入れることができた。川西市・猪名川町公立高等学校合同説明会と宝塚市特別支援教育研究会において、分教室の概要や求める生徒像、教育内容について対外的な発信を行うことができた。	3.71	A	在籍学部の取組を通じ、子どもの成長を感じる。	3.33	A	②ブログへの情報掲載を数多く行ったことで、ブログが十分な教育活動の情報発信になったとともに、外部の方が分教室を理解するための有用な手段となった。特に、学校見学会では、対象を中学1年生にも拡大したことで、中学生だけで70名近くの参加者となり、中学生保護者・本人の関心を集めていると考えられる。今後は分教室で、興味関心を集め、地域に住む中学生保護者・本人にとって適切な進路選択の一助となるよう尽力したい。
訪問教育 重点目標 (1)~(6)	①生活リズムを整え、生きる意欲を高める力を育てるために、家庭、医療、福祉との連携を図る。	①リハビリを見学して理学療法士からの指導助言を教育活動に活かす。保護者との対話を大切に、安全で安心な教育活動を行う。	①リハビリ見学には行けなかったが、保護者が授業の様子を撮影し、理学療法士へ共有した。そして、保護者を通して、理学療法士から助言を受け、授業で取り組んでいる指先を使っている活動に活かすことができた。また、保護者とは常に対話と情報共有を行い、特に体調面について丁寧に確認を重ねながら安全に授業を実施することができた。	3.16	B	※ 質問・回答は、すべて高等部に含まれる			①リハビリについては、保護者と相談しながら行うことができたが、今後は、理学療法士の指導助言を教育活動にさらに活かせるように機会があれば見学の場を持つよう工夫する。保護者とは、常に話し合うことができた。今後も保護者と相談しながら様々なことを進めていくように務める。
	②定期的なスクーリングの実施や該当学年と同課題の設定、タブレット映像での学習交流、校外活動への参加を通じ同年代の友達と触れ合う機会を充実させる。	②学部学年の教師と積極的に連携を図り、学習内容の設定をしたり、学校の様子を映像で見たりしながら、同年代の友達や他者と触れ合うことで豊かに生活できるようにする。	②月1回の定期的なスクーリングを行うことで、学部学年の教師に授業内容を確認し、同課題を元に生徒の実態に合わせて補助具やタブレットを準備するなど、学習内容を適切に設定することができた。また、同学年の授業や行事前の結団式の様子をタブレットで観ることで、家庭でも友達の様子を知ることができた。スクーリングや校外学習にも参加し、様々な方法で同級生と触れ合うことができた。	3.26	A			②学年・クラスの教師と、スクーリング前に相談しながら進めることができたので、スムーズに行うことができた。友達との触れ合いでは、声をかけてもらったり、バギーを押してもらったりすることも増えた。学習内容(特に美術)については、授業時間の関係上同じようにいかにこともあった。今後、教師との連携をさらに深め、早めから取組めるなど工夫する。	
総務部 重点目標 (3)	①ホームページなど様々な方法により日々の教育活動を効果的に保護者や地域に発信する。	①学校行事や日常の授業などの様子が伝わるブログを掲載するために、HP作成の研修を実施する。	①総務部を中心に職員全体で意識を高め、各学年で毎月担当を決めて取り組むことができた。生成AIを活用し、子供たちの生き生きとした姿を写真や記事で紹介することで、本校の魅力を伝えるブログを掲載することができた。また、ブログの掲載回数も昨年度より増やすことができた。今年度中には、HPも見やすくなるようにトップページの再編成などを実施する予定である。	3.46	A	学校は、ホームページやブログなどを通じて、学校行事や授業、日常生活の様子を伝えている。	3.58	A	①学年で毎月担当を決めるなどして、ブログ掲載に対して全職員が意識して取り組むことができた。今後は、学部紹介や行事予定、各種より等の更新が随時行われているか、定期的に確認し、ホームページの更なる充実を図る。HPを見やすくするように、各学部分室に確認し、より情報が伝わりやすいように工夫する。
	②イオン学校展を通して、地域への理解と啓発活動を推進する。	②各学部の特色が伝わる授業内容や行事の様子を掲載したスライドやチラシを作成し、わかりやすい学校紹介を行う。	②様々な場面で活用できるように、短時間のスライドを作成した。学部ごとの活動内容がわかる写真を選定し、イオン学校展で発表したり、ホームページに掲載したりすることができた。掲載に際しては、個人情報の同意書に基づき、使用する写真を選定した。また、オープンスクールでは、例年の2倍の来校者があり、地域の多くの方々に学校の様子を見ていただくことができた。アンケートでは、好意的な意見が寄せられるとともに、地域として校内の授業等への協力が可能であるとの回答を全体の7割程度から得ることができた。	3.48	A			②オープンスクールでは、例年の約2倍の来校者があり、本校の教育活動の様子を、これまで以上に多くの地域の方や事業所等に知っていただくことができた。一方で、安全で円滑な教育活動の確保との両立については、今後更に検討する必要がある。また、イオン展では、パネル展示等を通して地域の方に本校の取組を紹介することができ、理解を深めていただく機会となった。	

教務部 重点目標 (4)	①教育課程(カリキュラムなど)の見直しと改善を行う。	①各種教育課程委員会において、現在の教育課程(カリキュラム等)の問題点や課題点を整理する。特に学校行事の精選を行う。	①全校教育課程委員会および各学部教育課程委員会において、教育課程(カリキュラム等)の問題点や課題を整理し、次年度に向けて協議することができた。学校行事(校外学習、宿泊学習、修学旅行)の実回数や時期についても、継続的に協議を進めてきた。通常授業を重視しながら、児童生徒の成長を促す体験活動の在り方について共通理解の形成に努めた。課題は残るものの、行事の精選を進め、回数を減らす方向性を示すことができた。	3.37	A	教務部	学校は、個別の指導計画の目標・手立て・評価を分かりやすく記述している。	3.79	A	①全校及び各学部の教育課程委員会において、カリキュラム上の問題点や課題を整理し、次年度に向けた協議を進めることができた。学校行事の回数や実施時期については、通常授業を重視しつつ、児童生徒の成長につながる体験活動の在り方を踏まえ、教育効果を損なわないよう行事の精選を進めていくことが今後の課題である。
	②授業内容の精選(実施する単元の整理)と3観点を踏まえた評価規準の作成を行う(継続)。	②各学部で各教科・領域の指導内容(単元)を再確認する。児童生徒の実態に合わせて内容を見直す。高等部においては、指導計画の整理、指導単元の精選、3観点を踏まえた評価規準の例示を盛り込んだ学部確認事項改訂版を作成する。	②全校教育課程委員会や各学部教育課程委員会において、各学部で取り組む各教科・領域の指導内容(単元)を再確認するよう依頼した。高等部においては、指導計画の整理、指導単元の精選、3観点を踏まえた評価規準の例示を盛り込んだ学部確認事項改訂版を今年度中に完成させる見通しである。	3.38	A					
進路指導部 重点目標 (3)(4)	①卒業後の進路を見据えた、事業所情報や進路選択に役立つ情報を発信する。	①進路通信や保護者対象の進路に関する行事で情報提供すると共に、事業所が主催する企画の案内を配付し、家庭の関心を喚起する。	①学期に1回発行を継続し、地域のイベントを案内することができた。また、進路説明会で上がった質問について取り上げ、進路通信の中で回答することで周知を図ることができた。事業所による体験企画の案内については、事業所と学校間で情報共有を行うことで事業所による積極的な開催に繋げることができた。その結果、事業所をより具体的に知る機会となり、進路選択に役立てることに繋がっている。	3.44	A	進路指導部	学校は、進路指導に関して、生徒や保護者に適切な情報提供や助言をしている。	3.67	A	①事業所のご協力により見学会を企画することができ、事業所見学が身近な取組となったことで、積極的に参加されるご家庭が増えている印象を受けた。今後は、より多様な見学会機会を提供できるよう、案内の幅を広げていくことが課題である。
	②関係機関と連携し、進路学習に関する学びを充実させる。	②関係機関の方を招聘したり、企業や事業所からの作業提供を受けたりしながら、進路学習に関する学びの機会を提供する。	②高等部を対象に企業や事業所の方を招き、学びの機会を設定することができた。福祉用具のメンテナンスの授業では、道具を使ったり、分からないことを自ら聞いたりする姿が見られ大変有意義な活動となった。また、校内実習では企業や事業所から複数の作業提供を受け、実際の商品を活用した実習の機会を得ることができ、現場実習に向けた学びを深めることができた。	3.44	A					
生徒指導部 重点目標 (1)(2)	①安全・安心な学校づくりに向けて、学校環境の整備に努めるとともに、職員の資質や能力の向上を図る。	①学校防災危機管理マニュアルに沿って各種避難訓練や対応訓練の実施する。校内設備安全点検は全職員で毎月実施する。	①各種防災避難訓練や不審者対応訓練については、事前に実施要項の共通理解を通して各教員の役割の自覚を図り、訓練後には振り返りアンケートを実施することで、来年度に向けた改善・検討を行うことができた。校内設備の安全点検については、毎月全職員に点検日を通し、職員室に掲示した教室配置図に各自が点検済み箇所をチェックする方式を採用した。その結果、点検作業をスムーズかつ的確に管理することができた。	3.44	A	生徒指導部	学校は、避難訓練などを通じ、安全・安心な教育環境づくりに取り組んでいる。	3.82	A	①各種防災避難訓練は日時を告知せず実施するなどより実際の有事を想定して実施したい。不審者対応訓練は、今回の反省を生かし、新たな係を設けよりの確に不審者に対応できるようにしたい。校内設備安全点検は今年度から職員室に掲示した教室配置図でチェックを行ったが、よりスムーズにチェック箇所を把握できたため、来年度も継続していきたい。
	②児童生徒のいのちと人権を大切にするとともに、児童生徒が楽しく安全に学校生活を送れるような指導、支援が実践できる。	②職員研修にて、学校いじめ防止基本方針の周知と児童生徒のいじめを含めた問題行動への対応と連携を確認する。	②いじめ対応については、4月に職員研修を実施し、5月と2月にはいじめ対応委員会を開催した。さらに、学校内の実態を正確に把握するために、7月と12月には学校生活アンケートを実施し、11月と3月にはその結果を保護者に報告した。これらの取り組みにより、全職員でいじめ対応と組織的な動きについて共通理解を図ることができた。その他の問題行動等については、各学期末にその学期に発生した問題行動の内容と対応について、全職員で共通理解を図った。	3.46	A					
保健部 重点目標 (2)(3)	①児童生徒が自らの健康を主体的に維持・改善できる力を身に付けられるような保健学習を行う。	①月間保健目標・給食目標の学習を通じて、生活習慣を意識した実践的な健康教育を行い、健康に関する気づきを促す機会を増やす。	①月間の保健目標・給食目標の学習については、保健部が作成したパワーポイント教材を全学級に共有し、各学級では児童の実態に応じた方法で教材を活用しながら指導を進めることができた。また、「救急の日」や「良い歯の日」などの行事に合わせて放送を実施し、怪我の起こりやすい場所や、食べ物を何回噛むとよいかなどをクイズ形式で紹介した。児童生徒が楽しみながら健康について学ぶよう工夫し、日常生活の中で健康を意識するきっかけを作ることができた。	3.53	A	保健部	学校は、保健目標や給食目標を通じ、健康・体力の保持増進や食育に取り組んでいる。	3.76	A	クイズ形式で健康について学ぶ放送も実施し、児童生徒が日常生活の中で健康を意識するきっかけづくりができた。どの程度教材が活用できているか、実際の生活行動の変化につながっているかを確認しながら、学級ごとの効果的な取組を職員間で共有し、よりよい指導につなげていくことが課題である。
	②食に関する全体計画をもとに、安全・安心な学校給食の提供に努め、旬の食材や地場産物を取り入れた献立を通して、学校給食を「生きた教材」として活用した指導を行う。	②食に関する指導を積極的にを行い、給食日より献立表の一口メモを活用して、日々の給食指導をより充実させる。季節の食材や地場産物を紹介しながら、食文化や食の大切さについて児童生徒に伝えていく。	②毎日の給食放送を通じて、給食を「生きた教材」として活用することを意識した指導を進めることができた。旬の食べ物や調理方法など、児童生徒が興味を持つ内容をとりあげること、食への理解を深める工夫を継続的にを行い、その結果、児童生徒の関心を高めることができた。また、そら豆やとうもろこしの皮むき、野菜スタンプなど、給食に使われる食材に関連した体験活動を積極的に実施した。これらの活動を通じて、児童生徒の主体的な学びが促進されると共に、家庭での手伝いにもつながる学びとなった。	3.61	A					
自活・研究部 重点目標 (4)(5)	①校内研修会や学年の研究日、授業見学等を通して、PDCAサイクルを考えた授業作りを共通認識し、「学びあいの」ともに伸びる授業づくりを実践・情報共有を行う。	①児童生徒の「実態」「つきたい力」をふまえて児童生徒に関わる教師が話し合い、授業前後の評価を行うことで一人ひとりに適した支援方法・手立てを模索する。また、「ほめる」ポイントや指導が生活の中でどのように生きるかも確認し、児童生徒の意欲を引き立てる雰囲気をつくる。	①教師同士の話し合いは、定例の会議以外でも行われ、研修で学んだ手法を活かしながら、一人ひとりに適した支援方法・手立てについて、他者視点を入れながらPDCAサイクルに基づいて検討できた。また、伸ばしたい行動に焦点を当てて、教師が児童生徒を「ほめる」ことを中心にした支援を検討し実施した結果、関わりに変化が見られ始めたとの評価が自活・研究部員から得られた。	3.53	A	自活・研究部	学校は、子どもが「わかる」「できる」授業を展開している。	3.73	A	学年の研究日をポジティブ授業検討会として約60件の動画をもとに授業検討し、チーム内でPDCAサイクルで授業評価できた。また、授業のポイントを抑えたチェックリストを改定し、授業づくりに活かすことができた。課題は授業検討の回数を適切に調整していくことである。
	②自立活動研究日の研修内容を情報共有し、日々の指導に活かす。	②自活研究日を設定し、各学部の状況に応じて研修を行う。実践報告で情報共有する。	②自活研究日を設定し、各学部の状況に応じて研修を実施した。短時間で効率的な研修を行うことができ、予定していた数(学年につき1コマ)より多くの授業を学年内で動画を見合うことができた。各学年が複数の授業を研究授業として取り上げ、互いに研修を深める機会をもつことができた。授業者は、他の教師のアドバイスを受け、STの立ち位置やMTとSTの役割分担、授業の構成などの見直しを行った。その結果、授業の目標や予定を授業を行うチームのメンバーに事前に伝える取組がほとんどの授業で実施されるようになった。	3.52	A					
支援部 重点目標 (1)(3)	①児童生徒の理解しやすい環境をつくるために特別支援学校としてのUD化に取り組む。	①本校の基礎的環境整備について教職員で協議し、整理をする(現在整備できていることと今後整備できそうなこと)。	①各HR教室にタイムタイマーを設置し、各教室には新しい電子黒板を設置することができた。現在は、教室前面の掲示物の見直しについて呼びかけるとともに、各学部で整備可能な事項を検討し、取組を進めている状況である。	3.49	A	支援部	学校は、子どもについて理解し、クラス・学年・学部間で協力して支援している。	3.71	A	①各学部や学年で児童生徒が学びやすい教室の環境について、定期的にチェックし検討することができた。今後も、授業に参加する全児童生徒にとって学びやすい環境、生活しやすい環境、個別的に必要な配慮や環境設備を検討し、校内で設置可能な施設設備等を見直ししていくことが課題である。
	②特別支援学校のセンター的機能を担い、開かれた学校づくりを行う。	②近隣の学校に校内研修を公開する。	②夏季休業中、教育委員会を通じて近隣の学校に案内し、5講座の校内研修を公開することができた。	3.41	A					
校務運営 重点目標 (1)～(6)	①学校教育目標実現に向けて円滑な学校運営を行うために、各部の方針や業務内容を知り、各自の教育活動に反映させることができる。	①職員会議や職員朝礼を通じ、現在置かれた学校の状況を全教員で情報共有する。一人一人の教員がなすべきことや学校に必要なことを考える機会を設ける。	①国や県の教育施策や行事の動向などを踏まえ、本校の学校教育目標および学校経営の重点事項について、定期的な情報共有を行っている。これにより、教職員間で認識の統一が図られている。各部の方針や業務内容についても、年度当初の説明や随時の確認を通じて理解が深まり、教育活動への反映が進んでいる。また、多くの教員が、自身の目標や今年度の役割を意識しながら、研修の選択、意見の発信、新たなスキルの習得に積極的に取り組んでいる。こうした姿勢が、学校全体の教育目標の実現に向けた意識の高まりにつながっている。	3.36	A	校務運営	学校は、責任と使命を自覚し教職員間で協力して学校教育に取り組んでいる。	3.71	A	①教職員間で学校教育目標や各部の方針が共有され、役割を意識した教育活動が進んだ。研修参加も活発で、学校全体として目標達成への意識が高まっている。一方で、教員自身の自己評価は保護者評価より低く、改善の余地があると感じている。教職員がより自信をもって取り組める体制づくりが今後の課題となる。
	②「チームこやの里」をキーワードに関係者間で対話を重ね、大人・子どもが共に安心できる安全な教育環境を目指す。	②名前を呼び合い、挨拶を交わすことで信頼関係を築く。人権尊重を基盤とし、互いを認め合い、敬意をもって接する。対話の機会を増やし、教職員間・児童生徒・保護者が協力しやすい雰囲気を作る。	②「チームこやの里」の理念のもと、報告・連絡・相談が日常的に活発に行われており、組織としての一体感が醸成されている。諸課題への対応においては、チームで協議しながら解決策を模索している。また、対話の重要性を教職員が共有しており、関係者間の信頼関係の構築が進んでいる。情報共有や連携を確実に行うために、記録の作成と保存が定着しており、関係者間との連携記録の管理を通じて業務の継続性も確保されている。児童生徒へ称賛の言葉かけや同僚への承認の言葉かけが行われ、肯定的な関わりが学校文化として根付くようである。	3.30	A					